

忽ちたちまに京みやこに入らむとして懐おもひを述のぶる作さくを見る
に、生別せいべつは悲かなしく、断腸だんちやう万回よろうたひにして、怨緒えんじよ
禁め難とどし。聊いささかに所心おもひを奉たてまつる一首 井あは

せて二絶

四〇〇八番

あをによし 奈良ならを来離きはなれ 天離あまざかる 鄙ひなにはあれど 我わが
背子せこを見つし居をれば 思おもひ遣やる こともありしを 大おほ
君きみの 命みこと恐かしこみ 食をす国くにの 事こと取り持もちて 若草わかぐさの 足結あゆひ
たづくり 群鳥むらとりの 朝立あさだち去いなば 後おくれたる 我あれや悲かなしき
旅たびに行く 君きみかも恋こひむ 思おもふそら 安やすくあらねば 嘆なげか
くを 留とどめもかねて 見渡みわたせば 卯うの花山はなやまの ほととぎす
音ねのみし泣なかゆ 朝霧あさぎりの 乱みだる心こころ 言ことに出いでて 言いは
ばゆゆしみ 礪波山となみやま 手向たむけの神かみに 幣奉ぬさまつり 我あが乞こひ禱のま
く はしけやし 君きみがただかを ま幸さきくも ありたもとほ
り 月立つきたたば 時ときもかはさず なでしこが 花はなの盛さかりに
相見あひみしめとそ

四〇〇九番

玉梓たまほこの 道みちの神かみたち 略まひはせむ 我あが思おもふ君きみを なつかし
みせよ

四〇一〇番

うら恋こひし 我わが背せの君きみは なでしこが 花はなにもがもな 朝あさ
な朝あさな見みむ